

「堆肥化の実践」編



写真3 堆肥舎の全景

作業現場の汚れた環境は、作業者に不快感を与え、仕事への意欲を失わせる。

堆肥を処理する作業現場の環境は、常に綺麗でありたい。

I. 牧場運営における堆肥化処理業務の位置づけ

まず、堆肥化処理業務は、深刻化する畜産環境問題への対応策としてとらえなければならない。

これまでの大部分の牧場は、市街地から離れた場所に位置していることもあり、家畜ふん尿が牧場周辺の環境へ及ぼす影響をあまり気にしてこなかった。また、問題が発生しても悪臭の飛散など牧場周辺のごく一部の地域に限られるものであった。さらに、牧場周辺の住民も長年の慣習から多少の家畜ふん尿による問題は容認してきた。

しかし、最近の家畜ふん尿に起因する環境問題は、次のように随分と様相を変えてきている。

- ①牧場周辺に市街地などから新たな住民が転入してきており、これまで容認されてきたことであっても、こうした新たな住民からは問題として指摘されるようになってきている。
- ②河川や地下水の汚染により、問題が広域化している。
- ③家畜ふん尿が、人体に危害を与える大腸菌O-157やクロプトスポリジウムなどの病原性微生物の感染源とみられている。
- ④一般的な傾向として、国民の衛生意識が従来から比べるとかなり高まっており、一部には過剰とも思える状況になっている。

このようなことから、家畜ふん尿を適切に処理できなければ、牧場は多くの一般住民からの非難を受けることとなり、場合によっては牧場そのものの存在が危うくなる恐れがある。

したがって、これからの堆肥化処理業務は、牧場が地域の中で存続していくための必要条件として考えなければならない。

つぎに、堆肥化処理業務は牧場の業務全体を改善していく上での重要な業務としてとらえなければならない。

これまでの牧場における堆肥化処理業務には、単なる末端処理というイメージがあった。これは、家畜ふん尿を「飼料を生産し、家畜を飼養した結果、最終的に生じる必要悪」という考え方をしてきたためである。

堆肥化処理はとても煩わしい作業であり、できればあまり関わりたくない業務として誰からも見られてきた。また、広大な敷地を有する牧場では、周辺住民との距離が確保されているため、堆肥の山を放置しておいても取り立てて問題視されることがなかった。

このため、堆肥化処理業務は、家畜の飼養管理業務、飼料生産業務、治療・防疫業務とは異なり、必ずしも牧場運営にとって不可欠なものとは考えられてこなかった。

しかし、こうした考え方が、図7に示したように牧場を運営する上で様々な問題を生じ、結果として育種業務や調査実験など家畜を用いた本来業務の停滞を招く一因となっていた。

したがって、堆肥化処理業務は健全な牧場運営を行うため、家畜の飼養管理業務、飼料生産業務、治療・防疫業務と同等のウエイトをもって取り組まねばならない重要な業務として考えなければならない。

図7 家畜ふん尿の未処理が牧場の業務に及ぼす悪影響

